

食材として身近な存在であるキノコは自然界でも重要な役割を果たしています。

キノコは、養分の取り方によって、大きく「腐生菌（ふせいきん）」と「菌根菌（きんこんきん）」に分かれます。

前者は枯れ木や落ち葉から養分を得る種類で、シイタケやナメコが該当します。植物や動物の死骸などの有機物を無機物へ分解し、植物の栄養として土へ戻す役割を果たしています。森林が枯れ木や落ち葉で埋め尽くされないのは「森の掃除屋」と呼ばれる腐生菌が生態系の循環を支えているためです。

後者は生きた植物と共生関係を築き、自身に必要なデンプンを植物から吸収し、かわりに土中の水分やリンなどの養分を植物に与えます。マツタケやマイタケがこの種類です。植物は単独で生きるよりも、このキノコと共生することで、より多くの水や栄養を吸収することができます。また、根の細部がキノコの菌糸に覆われることで、乾燥や病害に対する抵抗性が高まります。

キノコに限らず、多様な生物が様々な役割を果たしながら生態系が維持されているのでしよう。

しかし、残念ながら、私たち人類の活動が生態系の循環を乱し、環境破壊を引き起こしていることは逃れようのない事実です。企業の社会的責任として、環境に配慮することは今や当然の時代となりました。

* 四国地方で食肉の製造・加工・販売を行っているS社では、近年、家畜の飼育過



地球環境あつての企業 持続可能な経済発展を

程で発生するおがくずや飼料の食べ残し・排泄物などを独自の製法で処理し、無害化する研究を重ね、有害物を一切出さないシステムを完成させました。糞尿は一〇〇%堆肥化し、近隣の農家に提供。処理水については栄養分を多く含んでいるため、地域と連携し、試験的に海へ放水するようにしました。すると、地域の漁業団体から、状態の良い魚介類や海藻類が収穫できるようになったと声があがったのです。

環境負荷の低減ばかりか、地域や他業種を活性化させた好事例といえるでしょう。こうした取り組みで、従業員は自社で働くことに誇りを持ち、愛社精神が育まれ、意欲の向上にもつながるはずです。投資家や消費者からも評価されるでしょう。

意識改革や新しいシステムの導入には、時間も費用もかかりますが、地域の自然環境ひいては健やかな地球があつてこそその企業です。持続可能な経済発展を叶えるべく、私たちは、知恵を絞って環境問題と向き合う必要があります。

倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋の著書『よろこんで生きる』には次のように記されています。

「人間は何のために生まれそして生きていくのか。地球をより美しく、よりりっぱにするためである。同時に自分の生活をより美しく、よりりっぱに、みごとにその良き持味の華をあらわすためである」

大自然を尊重し共存共栄することで、次世代に美しい自然を残していきましょう。